

進学で負の連鎖断つ

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第3部 学習支援(6)

本島南部の10代の不登校生徒は、進学で負の連鎖断つた。2月、困難家庭の男子中学生、タカシ(仮名)が自身の過去を振り返る作文を書いた。平仮名が目立つ文章には小学校低学年のころ、学校でいじめられた経験がつけられていた。

「牛乳をかけられたり、足をかけられたり、壁際近くでけられておちそうになったりしました。そのいじめは4年間つづきました。ぼくが、いじめられる理由が、みんなの上支に勉強ができてなくてとんがなびかばって、もみんと同じよみでできなかったのです。みんなと同じようにできないというところが、いじめのくるしみでした」

進学で断れない連鎖と断つていこうと、タカシは、いじめられてきた人たちに友だちにならなくて、

はたして、学校に行くのも苦しかった。毎日下を向いて通学して、

「いつものとおり、下を向きながらあるいていると、あつちのカードでした。ぼくは○のカードでした。ぼくはその日から、そのカードゲームをするよになりました」

カードゲームが日課のつづきを忘れられる唯一の楽しみになった。学校で褒められた経験がなく、カード大会に出て表彰されるのがうれしかったという。

「ぼくは、もっとあつちをつくらなくて、いじめてくる人たちと仲よくなりました。たのび、先生や家族や友だちには、いじめられていたよみでまじまじに話して、いじめられていたよみでまじまじに話して、いじめられていたよみでまじまじに話して、いじめられていたよみでまじまじに話して、

「自分の将来考える時間必要」



友達とカードゲーム大会の子ラシに見入るタカシ(右)＝本島南部

はありませんでした」

中学生になってから不登校生徒の仲間が通い始め、担任教師がまよまよ受け入れてくれたとあって、徐々に学校に通えるようになった。しかし担任が断れず、3年生になっても再び不登校になった。

かといふ強い拒否反応を示した。

タカシは4月、高校に進学した。学費や書籍提出を巡る問題などで進路はきりまで決まらず、学力や出席日数の関係で入試の合格も微妙だった。生活保護受給世帯の中卒者は進学しなければ住所から就労を勧められる。その進路問題について、「例とか、次の段階に行ける」。合格発表の日、高校の10代の男性は、親や先生は安堵の表情を浮かべた。「ぼくは学校に行っていない子を、そのまま社会に放り出すわけにはいかなかった」

学校から排除され、将来の展望がない中卒の少年に就労を強要すれば数年後、同じような家庭をつくる可能性がある。男性が進路確定のために奔走した。男性は「ぼくの子と同じように自分の将来に悩んだり、人生を考えたりする時間を与えてやりたい。どんな子にもその時間を確保できる社会となければいけない」と力を込めた。

「3年生になっても、ぼくは毎日中学校へ行って高校受験に向かっていた。でも新しい先生に言われた一言「言がまたいじめられていた時のことを思い出さず学校へいけなくなりました」。タカシを苦悩させるような言のある言葉。タカシの目には新しい担任が恐ろしい人食いサメのように映ったという。学校の話になると、「ジョーズの海に自分から飛び込む人がいます

(取材班・田嶋正隆) 〓火ノ木曜日記載